

品工場の機能は十分果たせるように改装する。大きな課題でした」

広い体育館は製造ラインの大事なスタート地点になる。そこで体育館と講堂の間にあった芝の中庭を室内に改装し、製造から梱包まで複数の大型機械を直列できるスペースを確保した。浄化槽も新設し、工場の排水は農業用排水路を使用することに。着々と改装が進められていった。

工場の求人募集もまちの広報で告知したところ、採用枠15人に倍以上の応募が集まった。「応募者の年齢は20代から60代まで。高い意欲を持った方々を採用できました」

また、福太郎の小清水進出は、2011年の東日本大震災から学んだメーカー企業のリスク対策とも無縁ではなかった。生産体制を分散化することで有事の際にも安定して事業を継続することができると九州に拠点を置く福太郎だからこそ

台風や津波が少ない北海道に魅力を感じたことも、今回のベストマッチを生んだ要因のひとつにあげられる。

**北海道の食材を使った新商品「ほがじゃ」誕生**

小清水町農業協同組合をはじめとする関係各機関の理解により、じゃがいもでんぷんが手に入るようになった福太郎。看板商品である「めんべい」を作る環境は整ったが、そこからさらに地元で愛される新商品を開発したいという同社からの申し出に小清水町関係者は驚き、喜んだ。それは現場を預かる浦田工場長にとってもうれしい決断だったという。

「進出する我々も不安ですが、迎えるまちの皆さんもきっと私たち以上に不安を感じていらっしゃると思います。どんな会社か来るのか、うまくいかなかったら

すぐに撤退してしまうのか。そうした不安を少しでも軽くするために我々はずちの皆さんと心を通わせる努力を怠ってはいけません。今も肝に銘じています」

新商品は「北海道フリッターおせん ほがじゃ」に決まった。パッケージには北海道を連想させる力強い「ほ」の一字。福太郎の専務たちが考えたさまざまな想いが込められている（右ページ参照）。材料は小清水産でんぷんの他にもオホーツクのホタテや函館・羅臼のイカ、北見産たまねぎ、道産ビート糖が使用されている。商品の製造者欄には「福太郎（株）小清水北陽工場」と明記され、ほがじゃの公式サイトでも「小清水北陽工場について」というコーナーで一連の経緯が詳しく紹介されている。福太郎の「心を通わせる努力」が続いている。



**体育館から始まる製造ライン 求人広告にも高まる期待**

「北海道にでんぷんを探しに行ったと思ったら、帰ってきて開校一番『小学校を買うのもいいかな』というので驚きました」とは、山口社長夫人にして同社専務取締役を務める勝子氏のお話だ。

2012（平成24）年3月に閉校後、小清水町の北陽小学校が九州企業のせんべい工場に生まれ変わる。北海道と九州を結ぶこのニュースは、同年2月10日、道庁の先である北海道東京事務所で行われた記者発表および小学校校舎の売買に関する仮契約の調印式によって広く全国に知れ渡った。

記者発表の翌日、今度は小清水町の愛ホールに場所を移し、町民約250人を前に仮契約が執り行われた。式後、山口社長は講演会の壇上から「小清水町の人たちに福太郎が来て良かったと思われるように、まちと一体となって小清水町を発展させたい」と述べ、大きな拍手が送られた。

新工場は福太郎株式会社の浦田隆常務取締役工場長に任された。

「地元の皆さんのお気持ち配慮して校舎の残せるところは可能な限り残しつつ、食

「北海道フリッターおせん ほがじゃ」ネーミング解説

【ほ】…【浦(ほ)】海の恵み&【圃(ほ)】山の恵み

【が】…【迓】自ら恵みを頂きに行って【賀】祝って喜びに変える

【じゃ】…大地の恵みじゃがいもの【じゃ】

7.8. 旧職員室は直売コーナーに変身。工場見学もできる観光スポットとして人気を集めている。

9. 工場オープン後は高橋はるみ北海道知事も視察に訪れた。中央が（株）山口油屋福太郎山口毅社長、右端が説明中の山口勝子専務取締役。

